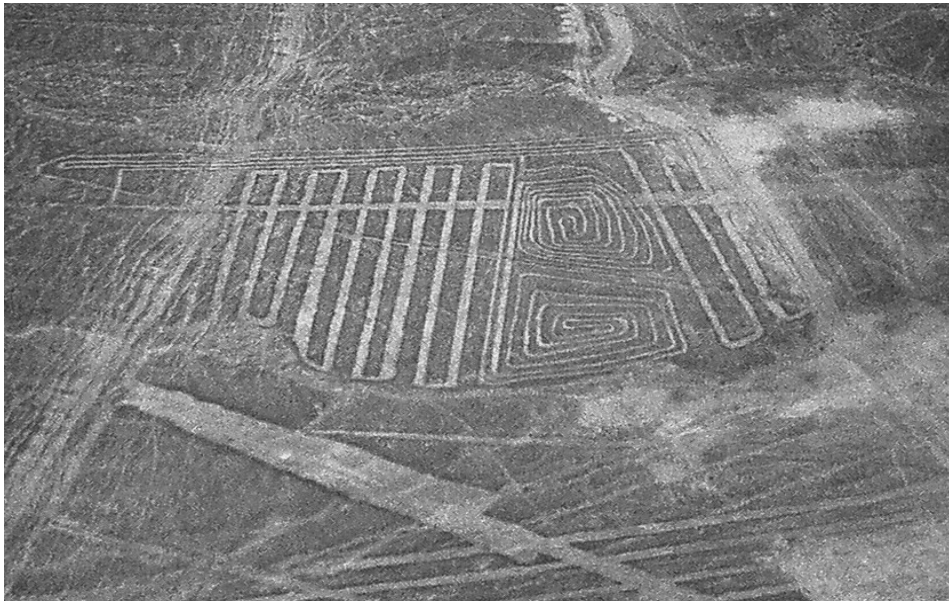

古代アメリカ学会会報

第 19 号



パルパの地上絵（日時計）

© 楠田枝里子(本稿「会員の投稿」覧参照)

目次

会員からの投稿

『古代アメリカ』の原稿募集

役員会報告

第 10 回総会報告

第 10 回研究大会報告

会計報告

新入会員

事務局からのお知らせ

2006 年 2 月

* 本稿掲載写真の無断転載・複製を禁じます。

セメントの記憶 - 2005年エルサルバドル、タスマル遺跡の調査ノート - 加藤慎也 / 伊藤伸幸

タスマル遺跡は中米エルサルバドル西部のチャルチュアバ市に位置し、近隣のカサブランカ、エル・トラピチェなどとともにチャルチュアバ遺跡群を形成している。2001年から同国では米ドルが通貨となっているが、それ以前の100コロソラにはタスマル遺跡の肖像が描かれていた。エルサルバドルを代表する遺跡と言えるだろう。この遺跡は1940-50年代にアメリカ人考古学者スタンリー・ボグスによって調査・修復され、現在は遺跡公園として多くの観光客を集めている。ボグスの修復作業ではオリジナルの土漆喰がセメントに似ているために大規模にセメントが使用された。この遺跡を見学に行き「セメントで作られたピラミッド」の印象をもった方も居られるのではないだろうか。

2004年10月18日未明、この遺跡のB1-2と呼ばれる建造物の南側が崩壊した。この建造物は斜壁(タルー)とその上部に垂直の張り出し(コルニサ)をもった階段状ピラミッドとして知られていたが、その南側が幅20m、高さ6mの広い範囲で崩れてしまった。このタルー・コルニサの建築様式については、ほぼすべてがセメントで覆われていたため、ボグスによる推定復元が全体の何%でオリジナルがどの程度残存しているのかが不明であった。今回のプロジェクトは、修復保存はもとより、オリジナルの部分の確認とそれよりも古い時期の建物の調査を目的に実施された。その結果、崩壊したピラミッドの内部には少なくとも4時期の建物が存在し、それらの建物はすべて上塗りを持たない石造であることが明らかとなった。これらの壁面および階段部では、穂状の石が20-30cmほど外側に突き出している。この建築様式はメキシコのトゥーラ遺跡で知られており、古代メキシコ中央高原とエルサルバドル西部の関係性を考えるうえで非常に興味深い資料である。

さて、詳細な考古学データの紹介は別の機会に譲るとして、ここではエルサルバドルの人々がこの遺跡をどのように見つめているのかについて紹介しよう。現在、この建物の北側半分ではボグスがセメントで修復した建物を、南側半分では内部から発見された石造の建物を展示している。しかし、このプロジェクト期間中に遺跡公園を訪れたエルサルバドル人たちは、特に過去にこの遺跡を訪れたことがある人たちは口をそろえて、セメントで崩壊してしまったセメントの部分への憧憬を語る。人々は「あの灰色の建物こそがタスマル遺跡なのだ」という。一方、海外からの

観光客は一樣に、なぜセメントで覆われているのかと不満を口にす。遺跡を目当てに訪れる人々にとって、セメントの色は先スペイン期の風情を損なうものらしい。かくいう筆者も始めて訪れたときには同様の感想を抱いた。

エルサルバドルではタスマル遺跡公園は小中学校の遠足の定番であり、海外からの観光客をうんざりさせるセメントで覆われた建物は、エルサルバドル人が遠足やコロソラを通して慣れ親しんできたイメージなのである。時間の経過とともに過去の記憶は新たなイメージで置き換えられ、定着していく。なにもこのプロセスは現代に限ったことではないはずである。先スペイン期においても、人々は数度にわたる建替えを不安な面持ちで眺めていたのではあるまいか。建替えという物理的な行為は、心理的には慣れ親しんできたイメージの破壊と新たなイメージの創造を意味するであろう。

ボグスの修復から半世紀が経過した。今回の調査によって南側で発見された石造の建物がタスマル遺跡のイメージとして定着するまで、まだしばらく時間がかかりそうである。

ワカ・パルティエダ神殿の発掘と巨大レリーフの発見

芝田幸一郎(日本学術振興会特別研究員、ペルー・カトリック大学加盟研究員)

2005年9月末からの約1ヵ月半、ペルー北部のネペーニャ河谷下流域にある形成期(2500~50 BC)の神殿遺跡、ワカ・パルティエダにて、第二次発掘調査を実施した。ネペーニャ下流での調査は、2002年のセロ・ブランコ遺跡発掘、2004年のセロ・ブランコ遺跡とワカ・パルティエダ遺跡発掘に引き続き、3回目となる。

ワカ・パルティエダ遺跡は、サトウキビ畑の中に取り残された小さなマウンドで、およそ50×60m、高さは10m。セロ・ブランコよりかなり小振りの遺跡である。実をいうと、当初は2004年の小規模発掘だけでいったん区切りをつけ、2005年はネペーニャ下流域の遺跡分布調査を行う計画だった。

ところが2004年にフタを開けてみると、とんでもない遺跡であることが判明した。地表下わずか数十センチのところから、多彩色の円柱列や、これまた多彩色の壁画で飾

られた小部屋が見つかったのである。最大の壁画(写真1)は約5×2m。赤、青、白、ベージュの4色プラス黒色充填刻線で描かれている。保存状態も良好で、形成期に特徴的な図像がはっきりと識別できた。こんな発見はペルー考古学で何十年ぶりだろう。新聞発表等を行うべきか迷ったが、何しろ完全に予想外の発見だったため、全く準備ができていない。時間も無い。それに不用意な一般発表は盗掘被害を招きかねない。それで、丁寧に埋め戻して、翌年の本格的発掘と、体制を整えた上での公表を選択した。また埋め戻しの直前には、2002年から交友関係のあった地元製糖会社役員一同を遺跡に招いて、一連の壁画を見せた。かねてから彼らは、地元観光開発の資源として周辺の遺跡に関心を抱いていたため、話は早かった。2005年の発掘開始まで三交代制で遺跡番人を置くことが決まり、発掘作業員の中から我々が番人として推薦した2名を、なんと正式に社員として雇用してもらった。



<写真1> ©芝田幸一郎

2004年の調査を12月に終えて首都リマ市に戻ってみると、新しい法律が承認されたことにより、外国人が発掘許可を得るための条件が、非常に難しいものになっていた。急いで手続きにとりかかり、半年以上かかってやっと条件を整えることができた。その後も、リマでの自動車事故やら調査メンバーの確保やらで手間取り、発掘開始は予定より2ヶ月近く遅れた9月末になってしまった。一方、製糖会社は約束を守ってくれただけでなく、調査中も例の2人を番人として置き続けてくれた。

2004年の発掘データから推測して、かならず保存状態の良い壁画が出てくると予想していた発掘区があった。ところが実際に掘り始めると、現れてきた壁画はボロボロであり、図像資料として使い難いものだった。また、少し掘り出す毎に保存修復専門家が張り付いて作業しなければならず、発掘全体が遅れがちになった。発掘期間の3分の2ほどが過ぎてしまうような成果が上がっておらず、メンバー全員が落胆ムードだった。中でもカトリカ大学生のマ

ルコ君は、その壁画の図像をネタにしてリセンシード論文を書く予定だったので、深刻な面持ちだった。論文テーマ変更の相談を持ちかけられたりした。

そんなある日、僕が神殿主階段部分でその発掘担当者と話合っていると、若い人夫がやってきた。例の発掘区で作業中のマルコが呼んでいるとのこと。大事な問題を検討している最中だったので、しばらくしてから行った。すると数人の人夫がむこうを見たままた突っ立っている。働いていない。注意しようところが口を開く前に、何人かが気付いて振り向いたが、様子がおかしい。僕を見ても、なにやら嬉しそうな表情を浮かべているだけで、作業を再開しようとしなない。

このときまでに、例のボロボロの壁画はどうか床面まで掘り出されていた。床は壁画から2mほど離れたところで下方に折れ曲がり、基壇外壁の一部となっているようだった。その先は砂層に埋もれていた。この外壁に何かあるかもしれないと思って、前日にマルコに内緒で砂層を小さく狸掘りしてみたのだが、ただツルツルの壁面が現れただけだった。

マルコは、まさにその外壁のあたりにしゃがみこんで、なにやら作業をしていた。僕に気付くなりニヤリと笑って脇に退いた。「A la miercoles! Qué es esto!?! (なんじゃこりゃあ!)」、それが視野に入った瞬間、思わず唸ってしまった。なぜか笑いの渦が起こる。なんでも、僕の最初の一声が何か、皆で予想していたらしい。

肉厚の、粘土製レリーフ(高浮き彫り)の一部だった。僕が狸掘りをしたところからわずか数十センチ横で、ツルツルの外壁は分厚く盛り上げられていた。まだ50cm四方しか出ていないが、逆さに表現された顔が判別できる。牙の生えた下顎のない口、上目遣いの目(エクセントリック・アイ)、まがうことなき「形成期の顔」だ。それにしても、昨日作られたばかりのように滑らかな表面をしている。ほぼ完璧、すごい保存状態だ。僕もすっかり魅せられてしまい、マルコや人夫に注意するの忘れ、いつの間にか刷毛を片手にレリーフの清掃を始めてしまった。

その後、レリーフの底部に達するまで、2週間もかかった。深さに加え、埋土の性質が問題だった。レリーフは3mの砂層で埋まっているが、その上に2m強の瓦礫層が載っていた。合計5mは、深い。ここで作業するものにはヘルメット着用を義務付けた。しかしほうっておけば砂は乾燥してトレンチ断面下方から徐々に落ちていく。そうすると瓦礫層は宙に浮く形となって危険極まりない。これが崩落したらヘルメットなど役に立たないだろう。だからトレ

ンチを階段状にしたり、瓦礫層断面にモルタルを厚く塗ったり、砂層をポンプ付き噴霧器で常に湿らしたりしながら掘り進めなければならなかった。

最初に見つかった逆さ頭は台形の枠に入っており、さらに大きな頭の上に載っていた。台形枠はトサカが耳を模しているようだった。では図像全体は何を表しているのだろうか。少しずつ掘り下げてゆくうちに、猛禽類だ、いや神話的人物像だ、などと予想は二転三転したが、最終的に猫科動物とわかった（仮にジャガーとしておく）。2匹のジャガーだ。1匹は完璧な保存状態だが、建築の重なりが障害となって右半身しか掘り出せなかった（写真2）。もう1匹はかなり崩れかけているが、ほぼ全身を掘り出すことができた。各ジャガーはおよそ高さ3m×幅4m。浮き彫り突出部の厚みは最大50cm。威圧感のある突き出た眼球の直径は、なんとバスケットボールほどもあった。



<写真2> © 芝田幸一郎

この巨大レリーフが見つかって、当然落胆ムードは消え去った。しかし嬉しさを実感する余裕はなく、発見に対する責任感で神経が張りつめた日々になった。さらに記者団の来訪、製糖会社との交渉、発掘現場でのアクシデント、地元の町々での講演会など、実にいろいろな事があった。しかし調査メンバーの団結と地元の協力が、全てを良い方向に向かわせた。肝心の盗掘対策としては、2007年に予定している次回調査までという約束で、製糖会社による番人制度の継続が決まった。ついでに発掘人夫をもう一人社員として雇ってもらった。ともかく、緊張が解けてようやく心から喜べたのは、全て終わってリマに無事帰還した夜、最初から最後までつきあってくれたマルコとビールを一杯やった時だった。

ナスカ・パルパの地上絵、ひとつの解釈

楠田 枝里子

(1)

世界遺産にも登録されている「ナスカの地上絵」は、南米ペルーの南海岸に広がる、砂漠と荒涼とした平原地帯に存在する。リオ・グランデの支流である、インヘニオ川とナスカ川に挟まれた、およそ500平方キロメートルの一带に、サル、ハチドリ、クモ、クジラなどの具象模様、三角、台形、渦巻きなどの幾何学模様、そしてそれに連なり縦横に伸びる夥しい長いラインで、構成されている。

同じくナスカ地域から出土した、ナスカ時代の土器や、織物にも、地上絵と同じ図像が頻出していることから、地上絵も、ナスカ文化の担い手である古代ナスカ人が描いたものと、知られている。

綿を栽培し、その糸を織り上げる優れた織物の技術を有していたナスカ人が、線分や図形の拡大・縮小の概念と高度なテクニックを持ち、それを地上絵作製にも利用していたことは、想像に難くない。

しかし、地上絵(フィギュアやライン)が何を意味していたかについては、さまざまな見解があり、未だ定説はない。

そんななかで、近年、ナスカの北西に位置するパルパと呼ばれる地域に、多くの新しい遺跡や地上絵が発見され、その発掘調査の結果が次々明らかになるにつれて、ナスカ研究も新たなステージを迎えることとなった。

実際のところ、これまでは学者によってナスカ時代の年代設定さえ異なっている状況であったが、最前線で発掘調査を行っている、ラインデルら、ドイツを中心とする国際研究チームの分析による年代区分が現在最も信頼度が高いことから、ここではその設定を用いることとする。

ラインデルのパルパにおける遺跡発掘・分析作業で、興味深い事項のひとつは、ハウランガの遺跡より、もたらされた。遺跡は3層から成り、上層部は、中期ナスカ時代(A・D・250~450) その下はパラカス時代(B・C・400~200) さらに下の層は、B・C・600年あたりのものと、分析された。

こうしたことから、我々が「パラカス文化」と呼んでいるものから「ナスカ文化」への移行は、連続線上にあると考えられる。パラカス人は、旅する民、あるいは旅を強いられた民だったのかもしれない。その昔、さらに北西の半島に文化の足跡を残したパラカス人たちは、南東への移動を続け、現在パルパと呼ばれている一带に、ある時期居を構えた。しかし、やがてそこから移動せざるをえない状況が生じて、さらに南東へ、ナスカの大地へと移っていったのである。

「移動せざるをえない状況」とは、何だったのだろう。パラカス時代から、ナスカ時代へと、この一帯の乾燥化が進み、深刻な問題となっていたことや、一方で突発的な大洪水による破壊にも悩まされていたらしいことが、知られている。よりよい環境、新しい可能性を求めて、人々は旅立ったのか。人口の増加に伴い、居住空間を広げる必要が生じていたかもしれない。あるいは、大きな気象変動に伴い、何か疫病のようなものが発生し、生き残るためには生まれた土地を離れざるをえなくなったということも、考えられるかもしれない。

ともあれ、これまでナスカで発見されてきた文化の一段階前の文化の跡がバルパに認められたということは、地上絵の考察にも、同様の分析が必要ということになる。つまり、ナスカの地上絵の源流として、バルパの地上絵を考察することが有効となるのだ。

(2)

これまでバルパの地上絵がナスカほどの注目を浴びてこなかったのは、両者の地形が著しく異なっていたからだろう。

延々と砂と石が続く、見通しのいい平らな一帯ナスカのパンパとは違って、バルパ地方は、切り立った山の峰の連続である。その壁面に描かれたフィギュアは目立ちにくいし、方向が少し違えば見えなくなってしまう。

現在、バルパの山々は、実は自然の山ではなく、そもそも北東のアンデスから雪崩こんできた堆積物であることが知られている。その堆積物の山を、後に、やはりアンデスから流れ込んできた水が浸食し、小刻みに切れ目を作り、数多くの峰の連続を作っていく。大きな流れは、深い谷を作り、そこに集落ができて、バルパの町ができることになった。

バルパの町をはさむ格好で、北側にバルパ川、南側にピスカス川が通り、その北西の、リオ・グランデに挟まれた堆積物の山々をサクラメント、南東側の一帯をサン・イグナチオと呼ぶ。いずれの方向にも、夥しい数の地上絵が認められる。バルパ川、ピスカス川、ともにリオ・グランデの支流である。

この一帯を、幾度もセスナから注意深く観察して、何よりも驚くのは、堆積物の山のうち頂が少し平らになった場所(台地)のことごとくに、プラットフォームが刻まれていることだ。実は、フィギュアよりも何よりも、台地をきれいに整備された、長四角や三角やらのプラットフォームのほうが、数多く、大きく目の前に迫ってくるのである。そして、そこから、谷へと降りていく道のように、ラインが伸びており、フィギュアは、斜面に飾りのように描かれている。

ナスカの地上絵のフィギュアはほとんどが、一筆書きで描かれ、どこかのラインに繋がっているのに対し、バルパのそれは、もっと多様である。ナスカのように一筆書きのようなものもあれば、斜面に、独立した絵模様として存在するものも多い。ナスカの具象模様のセンスに、あるていどの統一感があるのに対し、バルパでは、異なるレベルのフィギュアが存在する。

パラカスの古い時代に描かれたとみられる岩絵が、バルパの北方、チチクタラで発見された。子供の落書きのような、愛らしい人間や動物の姿。それはおそらく、身近にいる動物(リヤマなど)と、その社会の上層部の人間の姿、あるいは高貴な人々を描いたものであろう。多くの人物像が、片手にトゥミ(儀礼用のナイフ)、もう一方の手には、長い棒(位の高さを示すためのシャクであろう)を持つ。さらには、頭に、大きな飾り(あるいは帽子のような被り物)を付けている。玉座に腰掛けているのは、明らかに高い地位にある人物のしるしである。

バルパの地上絵のフィギュアにも、この岩絵に類似、あるいは繋がる人間(あるいは神)の姿が多く認められる。いつの世も、権力を持つ者は、それを誇示するように、己の姿を目立つ場所に刻みたいものなのだ。あるいは、その場所がいかに重要であるかを表現するために、社会的地位の高い人物の姿を刻んだ可能性もある。これらが、地上絵のフィギュアのなかでも、古い時代に描かれたものと、推測されている。同様に人物を描きながらも、年代の違いを思わせるフィギュアの数々に、造形の力の変遷を見ることができる。

そして、そうしたフィギュアが道先案内をするかのように、その先には、堆積物の台地を利用したプラットフォームが作られているのだ。

堆積物の山の平らな台地を利用し、そこをきれいに均して、特定のスペースを作る。もしかすると、時には必要に応じて土地を削るという行為があったかもしれないと、想像する。そもそも堆積物なのだから、頂を削るのもさほど難しいことではなかっただろう。こうして、利用できるスペースを確保し、有効に活かして、プラットフォームを作った。(あるいは、必要な大きさのスペースまで、削り、均したのではないか。)

元々は、そこに至る道を、人々はラインとして示したのだろう。そして、そこにプラットフォームがあることを示す装飾として、あるいはプラットフォームを飾り立てるものとして、フィギュアが壁面に描かれたのではないだろうか。

つまり、プラットフォームを作ることを始めてからは、実は、地上絵の最も重要な部分は、プラットフォームに存

在したのではないかと、考えられるのだ。

天に近い、土地の高处にあり、直線で囲いを作り、その内側に何十、何百の人々が集えるほどのスペースを確保する・・・それは、その地域の人々が祈りを捧げるために拵えた集会所であったのだろう。2004年に、プラットフォームのひとつに立ったとき、私はそう直感したが、その後の報告により、人々が歩き回った跡や、目印の石の置物や、織物、土器の破片、スポンディルス貝などが発見されたことが明らかになった。ナスカ研究において、プラットフォームに人々が集ったという考え方は新しいものではないが、今、パルパの地形が、そのアイデアに確信を与え、さらにディテールを推測する多くのヒントを与えてくれていると思う。

おそらく、パルパの人々は、適当な堆積物の山を均し、集落(部族)ごとに、集会所を作ったのだろう。その大きさが違うのは、集落に属する人間の数によるものだったと推測する。いくつかの方向から上ってこられるように、複数のラインを伸ばした。西洋の教会に、ステンドグラスや聖人の像を飾るように、土地の権力者の姿や、大切な動物リャマの形などを、刻んだのだ。

人間に始まった描写から、デフォルメされた図像、幾何学的な図形へと、フィギュアも、変遷していった。これは、やはり高度な織物の技術を持っていた、パラカス人が、線を単純化し描写することに才能を発揮したことと関係がないわけではないだろう。単純化した図案のほうが、拡大も容易で描きやすいことに気付いたのかもしれない。まるで、アーティストが新しいテクニックを見せびらかすように描かれた地上絵が、多々ある(表紙写真)。集落ごとに異なる図柄を、技術を駆使して描き上げて、互いに張り合っていたのかもしれない。

プラットフォームでは、祈りを捧げる儀式が行われたはずだ。神道、仏教、キリスト教など、古今東西を問わず、宗教的な儀式に効果的に用いられるのと同様に、音楽が奏でられていただろう。すでにナスカ時代の遺跡から、さまざまな楽器が出土している。

おそらく、司祭(祈禱師)は、人々をひとつにまとめ、自らの地位を高めるために、デモンストレーションを行っただろう。その必要から、プラットフォームからスタートしたラインが、なんらかの絵を描いて、またプラットフォームへ帰ってくる、という図形が描かれるようになったのではないだろうか。これがつまり、一筆書きの地上絵の始まりだ。司祭(祈禱師)は唱えながら、そのラインを注意深く辿って、神との交信を人々に印象づけた。フィギュアのラインの幅は、通常、大人が片足をぎりぎり乗せられる幅しかない。複数の人間が分け入ることは困難だが、選ば

れた一人、モンゴロイドの末裔である小柄なインディオの祈禱師なら、そのラインを器用に辿ることができたはずだ。

面白い例がある。「Bird」と呼ばれるこの地上絵には、時代による変遷が見てとれるのではないかと(写真)。舞台となった台地に、まず、必要な人数分の長方形のプラットフォームが作られた。さらに、司祭のデモンストレーション用の、鳥の絵が、台地の残りスペースに、プラットフォームから直接、描き出された。しかし、おそらく、その後、部族の人口の増加によって、スペースが足りなくなったのだろう。集会所を拡大せざるをえなくなり、といっても、人々が立てる台地の面積には限りがあり、結局、鳥のフィギュアの一部を潰して、プラットフォームを拡大せざるをえなくなったのだ、と考える。

同じ図形が、だぶって描かれている例も、少なくない。スパイラルは代表的な例だが、おそらく、司祭の代が代わったかなにかで、儀式の形は継承しながらも、次代の力を新たに示すために、わずかにずらしながら、同じ図形を描いたものではないか。まるで一族がそれぞれの旗に紋章を掲げるように、それぞれの地上絵はその集落のシンボルとして継承され、大事に用いられていたのではないだろうか。



<パルパの地上絵「Bird」> © A. Gruen, ETH Zurich

やがて、パルパに住んでいた人々が、南東への移動を考えざるをえない事態が、発生した。

ラインデルらによれば、パルパに人々が入植してきたのは、B.C. 1800~800年あたり。当時この地域には豊富に水があり、牧草地としても使用可能であったという。パラカス時代(B.C. 800~200)には、乾燥の時代に入る。初期ナスカ時代に入って、人口が増え、アンデスの山岳地方、海岸地方との通商関係も作られていったが、気候はますます深刻になっていく。砂漠化がさらに進行し、一方で、突発的な大洪水が、何度も一帯を破壊していった。こうして、人々は、その地を離れざるをえない

状況に追い込まれたのである。

プラットフォームで人々が祈りを捧げたのは、こういった自然の驚異に対する恐れからであったか。命の水が平和に、かつ十分にもたらされるようにとの、懇願の意味があったのだろう。

しかし、ナスカのパンパに移った一行の戸惑いはどんなものだっただろう。そこは、どこまでも平らな平原で、天に近い祈りの場所など見つけることはできない。

それでも、人々は、パルパでの習慣を、守ろうとしたのだ。

巨大なパルパの台地を思わせる、プラットフォーム。そして、それに繋がる長大な道としてのライン。パルパと同様に、数多くの幾何学模様の集会所が描かれた。キャンパスは限りなく広い。プラットフォームに繋がるフィギュアも、大小さまざまなものが生まれていった。深刻な水の問題を抱えた彼らが、フィギュアに水を関連づけたことは、疑問の余地がない。そこここで見られるジグザグ模様も、行き帰りを繰り返す、プリーツのような直線の連続も、共に水の流れを表している、との分析が、地上絵研究の初期のころから存在する。

こういった経緯で、ナスカのパンパには、さらにスケールの大きく複雑な地上絵が描かれることになったと、私は考える。

これまで、サルやトリといった具象模様ばかりが目ざされ、多く論じられてきたが、実はこれらはむしろ付随的な部分であり、地上絵の主たる部分は、台形や三角といったプラットフォームだったのである。

ラインのさし示す方向について、さまざまな考え方が提示されているが、正解はひとつではない気がしている。

それは、単なる集落からの通り道だったかもしれないし、法則性を持って綿密に計画されたラインであったかもしれない。その社会の長のセンスにより、時には、特定の季節の到来を告げる天体の方向を描いたこともあっただろう。数百年にも渡る時間の中で、複雑に絡み合ったラインの意味をひとつに絞り込むことは、不可能のように思われる。

(3)

ナスカ最大の遺跡、カワチは、巨大な祭祀センターとして知られ、オレフィーチ率いるイタリア・チームが、長い時間をかけて発掘調査を行ってきた。

そのカワチと、全く同じ構造を持つ遺跡が、ナスカ・パルパ・プロジェクトにより、パルパで発見された。ロスモリノスである。

両者とも、川の流れのすぐそばに位置する、高処にある。カワチはナスカ川沿いに。ロスモリノスは、リオ・グラン

デがパルパ川で支流になるすぐ手前に。川の方向には土地が開け、広く見渡すことができる。

ラインデルによれば、ロスモリノスが使用されていた期間は、A・D・50～250。建設の開始は、さらにそこから遡ることになるか。

カワチの建設期間は、オレフィーチによれば、B・C・150～A・D・200。

奇妙に重複するこの2つの遺跡は、おそらく、同じ目的を持って作られたものではないだろうか。

地上絵のプラットフォームが、集落(部族)ごとの礼拝所であったとすれば、社会が拡大するにつれ、それらを統括する役割を持った建造物が必要になったはずである。そこは、政治的及び宗教的意味合いを持った場所だ。

パルパに留まる人々のための、ロスモリノス、ナスカへと希望を繋いだ一行のためのカワチ。そんな図式が見えてこないだろうか。

ロスモリノスは、突然の閉鎖を見るが、ラインデルは、それを、大洪水を予測しての閉鎖であったと、分析している。

まだ現在のところ、ロスモリノスに、明らかに祭礼を行ったと見られるスペースは見つかっていない。しかし、カワチも、長い年月のなかで、少しずつ在り様を変え、最終的に祭祀センターとしての位置を確立したようであるから、ロスモリノスは、気象の変動により、移行の途中で閉鎖されてしまったということかもしれない。

そうして、カワチが、ナスカ文化の祭祀センターとしての中心となっていったのではないだろうか。

ひとつ海を隔てた、同じモンゴロイドである私たちの国も、三重県の伊勢市に、全国の全ての神社の長であり中心である伊勢神宮を有している。(正しくは、単に「神宮」と呼ぶ。日本で「神宮」と言えば「伊勢神宮」のことを指すのだ。)あまり知られていないことだが、驚くことに、伊勢の町の中には、実は、125ものお宮とお社が点在する。小さな地域単位に、すぐそばに社があり、日常生活に密接に結びついている。それらは、月や風といった自然の神々や、神話に登場する神々たちの住処だ。そして、それらの小さな神社を統括する形で、その頂点として、すぐ前に五十鈴川の流れを見下ろす内宮が存在し、巡礼者を受け入れる。またそこは、身分の高い人々が参拝する聖なる場所である。

この構造が、ナスカにも折り重なって見えてくる。日常的な集会礼拝所である、プラットフォーム。政治的宗教的中心として、水の流れを見下ろす高処に打ち立てられたセンター。

さらに想像をたくましくすれば・・・。(伊勢)神宮には、実は、2つの中心点がある。言うまでもなく、太陽神である天照大神を祭る内宮が頂点なのだが、もうひとつ、豊受大神という豊穰の神を祭る社が、外宮として、もうひとつの中心点になっているのだ。そして、この内宮と外宮は、同じ構造で建造されているのである。もしかすると、カワチとロスモリノスを、内宮と外宮という構図で見ると、面白いかもしれない。

さすれば、カワチのすぐそばの遺跡エスタケリーアが、伊勢神宮という斎宮、神事に備え神に仕える斎王たちの居住地であったとは、考えすぎであろうが・・・。

神事からお神楽が生まれ、お神楽から舞踊芸術が発達したように、プラットフォームでの神事からスタートして、ナスカの地上絵は、神事を離れて純粋化された視覚的な芸術として、完成されたのではないか。だからこそ、大地に

描かれた壮大なドローイングは、2000年の時を超えて、今なお人々を魅了し続けるのだ。

追記

ここにまとめた文章は、2004前、ナスカ・パルパ・プロジェクトの一環として、パルパ博物館建設に関係したとき、パルパを歩いて、得た考えである。ドイツ考古学研究所のマルクス・ラインデルを中心とするチームの新しい発掘調査、新しい試みは、ナスカ研究に更なる大きなステージをもたらすものと、確信した。

年月をかけて調査研究を重ねてこられた科学者の皆様に敬意を表し、素人の見解を形にすることはしばらく控えてきたが、20年あまりにわたりナスカを愛してきた者のひとりとして、この機に、文章をまとめてみる気持ちになった。

残念ながら私は考古学者ではないが、この途方もない魅力の世界に案内して下さった皆々様に、心から感謝申し上げたい。

『古代アメリカ』の原稿募集

会誌『古代アメリカ』第9号(2006年12月発行予定)に掲載する原稿を募集します。

投稿希望者は、会誌に掲載されている寄稿規定、執筆細目をよくお読みください。論文原稿は、随時募集し、査読を終えたものから(原稿受領後1~2ヵ月で査読終了予定)順次掲載する予定です。

書評、調査報告の原稿は、2006年5月31日とします。

投稿希望者は、編集委員会宛(下記佐藤宛)にメールまたは郵便にてご連絡ください。編集委員会より、「投稿カード」を配布致しますので、これを提出原稿に添付してください。

尚、原稿掲載の可否は、規定による査読結果を踏まえて、編集委員会が決定します。

* 投稿に関する連絡先:

佐藤悦夫

〒930-1292

富山市東黒牧65-1 富山国際大学国際教養学部

Tel: 076-483-8000、Fax: 076-483-8008

E-mail: satoh@tuins.ac.jp

役員会報告

古代アメリカ学会役員会議事録

開催日時: 2005年12月3日(土) 10:00-11:30

開催場所: 早稲田大学戸山キャンパス39号館第5会議室

出席者: 加藤泰建、横山玲子、青山和夫、長谷川悦夫、

佐藤悦夫、寺崎秀一郎、徳江佐和子、吉田晃章

委任状出席者: 大平秀一、佐藤吉文

議長: 横山玲子 書記: 吉田晃章

1. 2004年度各委員会事業報告ならびに審議事項等

(1) 会誌編集・・・編集委員より『古代アメリカ』第8号の編集結果について報告がなされた。1) 発行された第8号では、図版等が鮮明に印刷されるよう紙質を改

善した。2) 研究ノートという投稿枠を廃し、調査報告を設けたため、投稿規定の一部改訂が行われた。また、以下2点について審議し、合意した。1) 投稿原稿が少ないという問題に対し、編集委員会は特集記事を組むための企画等を行い、積極的に原稿を集めることができるものとする。2) このため会誌編集に関する編集委員の増員が決定され、編集役員が非役員の中から数名任命することとした。

(2) 会報編集・・・会報17号が2月に、会報18号が7月に発行された。会員の投稿が始めに掲載されている現在の構成が良いとの評価を得た。

(3) 研究大会・・・2004年12月11日に早稲田大学戸山キ

キャンパス 36 号館 6 階 681 教室で総会、研究大会が開催され、盛況のうちに閉会した。

(4) 広報・・・ホームページの更新を 6 回行った。

2. 2005 年度各委員会事業計画

(1) 会誌編集・・・会誌 9 号は、2006 年 11 月に発行を予定し、原稿を随時募集する。また、必要であれば、特集などの企画を行う。

(2) 会報編集・・・2 月に会報 19 号、7 月に会報 20 号を発行予定している。

(3) 研究大会・・・2005 年 12 月 3 日(当日)早稲田大学戸山キャンパス 36 号館 6 階 681 教室で総会、研究大会を開催する。2006 年度総会、研究大会の準備を行う。

(4) 広報・・・ホームページの更新を随時行う。

3. 2004 年度決算報告ならびに監査報告

事務幹事より 2004 年度(2004 年 10 月～2005 年 9 月)決算報告が行われた。続いて、監査委員により適切に処理されているという報告がなされた。

4. 2005 年度予算案

事務幹事により 2005 年度(2005 年 10 月～2006 年 9 月)予算案が提示され、了承された。2005 年 6 月には、2006 年度役員選挙を実施するため、選挙費用も支出に計上された。また、会誌の発行時期が変更になり、会誌印刷・製本費用等の支出が翌年度となった。このため会計年度と会誌印刷・製本費用等の支出のずれについて審議し、次のように合意した。1) 会誌の印刷・製本費用の予算を繰越金として繰り越し、翌年度に支払われる印刷・製本費用に引き当てることとする。2) 編集業務等、年度をまたぐ費用も領収書の日付に従い年度末で締め、決算することとする。

5. 会員管理報告と新入会員および退会者報告

事務幹事より、12 月 2 日までの新入会員 14 名と退会者 1 名が報告された。12 月 2 日現在の会員数は 166 名であった。

会員管理について、以下 2 点を審議し、合意した。1) 会費未納者に対し、今後学会事務局が督促状を郵送し、未納分の会費を徴収できることとする。2) 会則第 11 条 1 項に基づいて、会員 3 名の除名を総会審議にかけ、会員の承認を得ることとする。

6. 2006 年度役員選挙について

6 月に行われる役員選挙の日程が示され、1 月に選挙管理委員候補立案を行うこととなった。

7. 次期研究大会開催校

次年度の総会・研究大会(第 11 回大会)は、早稲田大学において、2006 年 11 月末から 12 月頃に開催することとなった。

8. その他

(1) 「日本学術会議協力学術研究団体」への登録について
本学会は、元「日本学術会議登録学術研究団体」への登録を目指すことが決められており、これまで個別に連絡し、学術研究団体となることを依頼、申込書の返送を求めていた。しかし 2005 年 10 月に発足した新しい学術会議の体制の下、登録制度は廃止となり、これにかわり「日本学術会議協力学術研究団体」制度が設けられた。このため役員会では、「日本学術会議協力学術研究団体」への登録について審議し、次のように合意した。先の総会での「登録団体を目指す」という決議が「協力学術研究団体」に対しても有効であると考え、今後は可能であれば「学術会議協力学術団体」に申請することとする。

(2) 非会員の研究大会参加費について

非会員の大会参加費について審議し、合意した。1) 研究大会の会場を無料で借用しているため、参加費は徴収しないこととする。2) ただし、非会員が大会に参加する場合、研究大会資料代として、一律 500 円を徴収することとする。以上

第 10 回総会報告

古代アメリカ学会第 10 回総会議事録

開催日時：2005 年 12 月 3 日(土) 17:15～17:55

開催場所：早稲田大学戸山キャンパス 36 号館 681 教室

議長：横山玲子、書記：徳江佐和子、

議事録署名人：渡部森哉、土井正樹

総会成立の定足数を満たすことを確認した後、議長と議事録署名人を選出し、報告及び審議を行った。

1. 2004 年度事業報告ならびに 2005 年度事業計画

(1) 2004 年度事業報告

会誌編集・・・2005年度会誌『古代アメリカ』第8号が12月に発行された。投稿規定の一部が改訂された。

会報編集・・・会報17号が2月に、会報18号が7月に発行された。

研究大会・・・2004年12月11日に早稲田大学戸山キャンパス36号館6階681教室で総会、研究大会が開催され、盛況のうちに閉会した。

広報・・・ホームページの更新を6回行った。

(2) 2005年度事業計画

会誌編集・・・会誌9号は、2006年11月までに発行を予定している。原稿は随時募集している。

会報編集・・・2月に会報19号、7月に会報20号を発行予定している。

研究大会・・・2005年12月3日(当日)早稲田大学戸山キャンパス36号館6階681教室で総会、研究大会を開催する。2006年度総会、研究大会の準備を行う。

広報・・・ホームページの更新を随時行う。

2. 会計報告

(1) 2004年度決算報告

事務幹事より2004年度(2004年10月～2005年9月)会計の決算報告が行われた。

(2) 2004年度決算監査報告

監査委員により決算書、ならびに帳簿、領収書などを監査したところ正確に記入整理されていると監査報告がなされた。決算報告ならびに監査報告の内容は拍手をもって承認された。

3. 2005年度予算案

事務幹事により2005年度(2005年10月～2006年9月)予算案が提案された。会員の指摘により、収入の部の「会費収入」の項目に前年度会費未納分を加え、同額を支出の部の「予備費」に加える修正案が提案された。修正案は拍手をもって承認された。

4. 会員数報告ならびに除名についての審議

事務幹事より、新入会員14名と退会者1名が報告された。また、現在(12月3日総会開始時)の会員数は166名であると報告された。

会則第11条1項に基づいて、会員3名の除名が審議にかけられ、過半数の賛成により承認された。

5. その他

代表幹事より、2006年6月に行われる役員選挙に先立ち、近日中に選挙管理委員会を立ち上げることが報告された。

以上

第10回研究大会報告

第10回総会后、下記の14組の方々から最新の研究成果・調査速報を発表していただきました。発表者と発表題目は次の通りです。なお、発表内容は当日配布された『古代アメリカ研究会第10回研究大会発表レジュメ』に掲載されております。

研究発表：

(1) 「古典期マヤ文明の日常生活と社会経済組織

- アグアテカ遺跡出土の石器分析を中心として -

青山和夫(茨城大学)

調査速報：

(2) 「ホンジュラス、ラ・エントラダ地域における発掘調査概報」

寺崎秀一郎(早稲田大学)

(3) 「チャルチュアバ遺跡タスマル地区調査」

伊藤伸幸(名古屋大学)・柴田潮音・加藤慎也

(4) 「エクアドル・ソレダー遺跡の発掘調査(第3次)」

大平秀一(東海大学)

(5) 「神殿と動物表象：リモンカル口遺跡2005年度調査より」

坂井正人(山形大学人文学部)

(6) 「ペルー北部高地、コンゴーナ遺跡の石彫について」

渡部森哉(日本学術振興会特別研究員)

(7) 「ペルー北高地パコバンパ遺跡2005年度調査概要」

関雄二(国立民族学博物館)・ワルテル・トツ・モラーレス(ペルー財団法人天野博物館)・ファン・パブロ・ビジャヌエバ(ペルー国立サン・マルコス大学)・井口欣也(埼玉大学)

ラファエル・ベガ・センターノ(ペルー国立サン・マルコス大学)

ポスターセッション：

(8) 「博物館におけるアンデス資料を利用した展示例の紹介(教育普及の取組み) - 光記念館 特別展 インカ文明展を事例として - 」 吉井隆雄・竹内健二(光記念館)

調査速報：

- (9) 「クントゥル・ワシ遺跡出土動物骨資料の調査概報」
 鶴澤和宏（東亜大 総合人間・文化学部）・関雄二（国立民族学博物館研究戦略センター）・加藤泰建・井口欣也（埼玉大教養学部）・坂井正人（山形大文学部）・大貫良夫（財・リトルワールド）
- (10) 「クントゥル・ワシ遺跡出土遺物の整理作業中間報告 - 石器、骨角貝器、土製品、金属器について -」
 荒田恵（総合研究大学院大学）
- (11) 「先史アンデス社会におけるソーダライトの利用と流通に

関する調査研究」

- 加藤泰建(埼玉大学)、清水正明(富山大学)、清水マリナ
- (12) 「ラス・ワカス遺跡および周辺諸遺跡 2005 年度発掘調査」
 鶴見英成（日本学術振興会特別研究員）
- (13) 「ペルー、ヤングヌーコ遺跡ならびにケウシュ遺跡の調査」
 横山玲子・吉田晃章・須藤大輝・松本亮三（東海大学）
- (14) 「ウルピカンチャ遺跡2005年度発掘調査報告」
 徳江佐和子・熊井茂行(明治学院大学)

会計報告

(1) 2004 年度決算報告 (2004 年 10 月 1 日 ~ 2005 年 9 月 30 日)

収入の部

項目	予算額	決算額	増減	備考
前年度繰越金	312,131	312,131	0	
会費収入	608,000	300,000	-308,000	
2004 年度研究大会非会員参加費	0	0	0	
その他	9,869	44,048	34,179	会誌一般販売収入、利子
合計	930,000	656,179	-273,821	

2005 年度会費(預かり金)		10,000		
-----------------	--	--------	--	--

支出の部

項目	予算額	決算額	増減	備考
会報・名簿発行費	35,000	31,942	3,058	
総会・研究大会補助	65,000	28,100	36,900	
役員会旅費補助	50,000	0	50,000	
通信費	200,000	73,190	126,810	
ホームページ開設維持費	10,000	7,620	2,380	
会誌発行費	530,000	286,551	243,449	
消耗品費	20,000	5,574	14,426	
その他	0	0	0	
予備費	20,000	0	20,000	
合計	930,000	432,977	497,023	

決算収支	収入	支出	収支
収入決算額	656,179		
支出決算額		432,977	
次年度繰越金		223,202	
合計	656,179	656,179	0

(2) 2005年度予算案(2005年10月1日~2006年9月30日)

収入の部

項目	予算額	備考
2004年度繰越金	223,202	確定
会費収入	664,000	会員数 166 × 4,000 円
会費収入(前年度まで未納分)	176,000	未納会員数 44 × 4000 円
大会資料費	10,000	
その他	12,798	会誌一般販売収入、利子
合計	1,086,000	

支出の部

項目	予算額	備考
会報・名簿発行費	40,000	会報 19,20 号、2005 年度名簿
総会・研究発表会運営費	65,000	2005 年度大会
役員会旅費補助	50,000	2006 年 7 月
通信費	200,000	会誌・会報等発送費
ホームページ維持費	10,000	
編集委員会費	175,000	編集作業に関わる経費
消耗品費	20,000	領収書、宛名ラベル、封筒、文具等購入費
その他	50,000	役員選挙経費
予備費	176,000	
繰越金	300,000	会誌(9号)印刷・製本費引当金
合計	1,086,000	

新入会員

2005年6月16日から2005年12月7日までの役員会
(メールを含む)で以下の方々の入会が承認されました。
会員数は現在168名となっております。

- ・井関 睦美
- ・板垣 達也
- ・竹内 健二
- ・稲垣 幸祐
- ・鶴澤 和宏
- ・近藤 祥子

- ・森下 壽典
- ・大谷 博則
- ・角田 祥子
- ・木田 美希
- ・渡邊 光恵
- ・姉崎 智子

事務局からのお知らせ

1. 会費納入のお願い

2005 年度までの会費をまだご納入でない方は、同封いたしました振込用紙にてお振込み下さい。古代アメリカ学会は会員の皆様の年会費で運営されております。ご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

2. 会報への投稿募集

『会報』第 20 号への原稿を募集します。現地調査や博物館調査での体験やエピソード、各地で行われている研究会や講演会、展示会、出版物の紹介などの情報を、会報委員または研究会事務局までお寄せ下さい。多くの方の投稿をお待ちいたしております。

3. 会員の吉永史彦さんが転居先不明となっております。転居先をご存じの方は、事務局(jssaa@sa.rwx.jp)までお知らせ下さい。

4. 会誌バックナンバー販売のお知らせ

『古代アメリカ』のバックナンバーを 1 冊 2000 円で販売しております。購入をご希望の方は、ご希望の号数、冊数を古代アメリカ研究会事務局までお知らせ下さい。会誌と振込用紙をお送りいたします。なお、第 3 号は品切れとなっております。また他に残部希少の号もございますので、品切れの際はご容赦下さい。

5. 編集事務局佐藤吉文氏（編集委員）の住所変更

編集事務局の佐藤吉文氏の住所が変更になりましたので、お知らせいたします。編集業務の連絡等、お間違えないようお願いいたします。

< 編集後記 >

会報の「会員の投稿」覧をより充実させていこうという方針で、引き続き編集をおこなっています。今回は多くの方に投稿していただき、非常に充実した内容の会報にすることができました。また、投稿覧に写真を掲載するというはじめての試みをおこないました。ご意見、ご感想お待ちしております。

投稿してくださった加藤慎也さん、伊藤伸幸さん、芝田幸一郎さん、楠田枝里子さんに、この場を借りてお礼を申し上げます。

2006 年 2 月 徳江佐和子

< 表紙写真提供：楠田枝里子氏 >

発行 古代アメリカ研究会
発行日 2006 年 2 月 15 日
編集 徳江佐和子 (sawakot@mtd.biglobe.ne.jp)
吉田晃章 (vivaguadalajara@ybb.ne.jp)

古代アメリカ研究会事務局
〒259 - 1292 神奈川県平塚市北金目 1 1 1 7
東海大学大学院文学研究科文明研究専攻院生室内
電話：0463 - 58 - 1211 (内線 3068)
Fax：0463 - 50 - 2104
E-mail：jssaa@sa.rwx.jp
郵便振替口座：00180 - 1 - 358812
ホームページ URL <http://jssaa.rwx.jp/>